

研究課題	ICT を活用した郷土学習カリキュラムの開発
副題	～地域の魅力を発信する総合的な学習「ひきよせプロジェクト」と環境保全活動「海の森プロジェクト」の挑戦～
キーワード	総合的な学習の時間 探究学習 郷土学習 ICT 活用 協働的な学び 環境保全活動
学校 / 団体名	公立白浜町立日置中学校
所在地	〒649-2511 和歌山県西牟婁郡白浜町日置 979-2
ホームページ	https://www.town.shirahama.wakayama.jp/soshiki/kyoiku/somu/gyomu/chugakko/hiki/index.html

1. 研究の背景

令和6年度、本校は生徒21名の極小規模中学校である。和歌山県南部の日置川河口の校区は、海山川の自然豊かな場所である一方、過疎化が進行し地域の課題となっている。本校の特色あるカリキュラム「ひきよせプロジェクト」（総合的な学習の時間）は、2019年にスタートし6年目を迎える。「日置の魅力を発信する」という理念の元、総合的な学習の時間を利用し、地域の魅力を調査し、インタビューした内容を編集し、フリーマガジン「ひきよせ」として情報発信している。一昨年はフリーマガジンひきよせ2号を作成・発刊し、地域内外からもたくさんの評価の声をいただき、「ひきよせプロジェクト」は本校の特色ある教育活動の重要な柱となっている。地域の魅力を見出し、情報発信し、そこから様々な学びに取り組む結果、生徒が自分自身や郷土に自信と誇りを得るとともに、地域の未来の可能性にもアプローチするといった成果をあげている。これらの活動にはICTの活用は欠かせない。撮影や記録、動画編集を行うICT機器（iPad）が本校には不足しているため、本助成を活用し、充実した学びを実現し、本校の研究活動を継続していきたい。

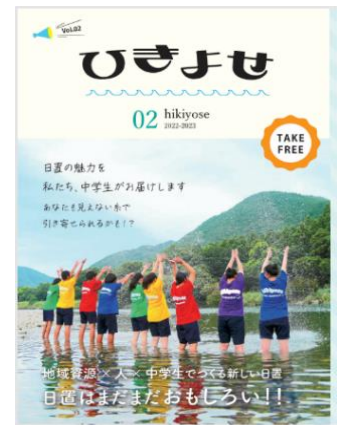


図1 ひきよせ2号の表紙

フリーマガジンの「ひきよせ」というタイトルは生徒たちに募集した中から生まれた。日置中学校の日置（ひき）が由来である。多くの人がこの地域の魅力に「ひきよせ」られることを願っている。

2. 研究の目的

研究の目的は3つある。

1つ目はICTを活用した郷土学習のカリキュラムを開発することで、生徒のICTリテラシーを高め、主体的に取り組む生徒を育成することである。

2つ目は、生徒が収集・作成したデジタルコンテンツを、WEBやSNS、本校が作成しているフリーマガジン「ひきよせ」を用いて、地域内外の人々に情報を発信する協働的な学習を構築することである。

3つ目は、フリーマガジン作成の過程において郷土の魅力を見だし、そこから様々な学びに取り組む結果、生徒が自分自身や郷土に自信と誇りを得るとともに、地域の未来の可能性にもア

アプローチすることである。

昨年度、本校の教育活動（経緯・背景に記述）に賛同した企業「日置（ひおき）電機（長野県上田市）」と「和歌山工業高等専門学校」と共同し、海の環境保全活動に取り組む「海の森プロジェクト」が開始された。具体的には近年減少しているアマモ場の再生を目的に、本校の空き教室を利用し、水槽でアマモの育苗に挑戦する。企業や高専とつながり、アマモの共同研究を続けていくことで、生徒も教師も社会に関わっていくことができる。生徒また教師も地域から学ぶ姿勢が身に付いていく。さらに、このような先進的な取り組みが、地域内外から注目され、将来の地域活性化につながればという願いもある（目的の3つ目につながる）。

以上のことから、本研究では、ICTを活用した郷土学習のカリキュラムを開発することで、生徒のICTリテラシーを高め、主体的に取り組む生徒を育成することである。

3. 研究の経過

今年度はフリーマガジン「ひきよせ3号」を作成し、並行して「海の森プロジェクト」を継続していくことが総合的な学習の時間の中心となった。

フリーマガジンの作成の手順は、取材先の選定、取材の準備（アポ取り、質問を考える、練習）、現地での取材、取材内容の整理・まとめ、フリーマガジンの構成作業、PR動画の作成、校正作業である。

これらを意図した「ひきよせプロジェクト」は、以下の5つの主体的対話的な学習場面に分けられる。

- A 「ひきよせプロジェクト」の構想・計画・・・1年間の活動計画を作成する。
- B 取材の準備・・・グループ分けを行い、アポ取り、練習。前年度までの成果物を基にして取材先を精選する。取材先の対象に対する問い、質問事項を考える。
- C 現地での取材・・・グループに分かれ、現地での取材を実施。iPadを活用し、取材を記録しデジタルデータを収集する。
- D 取材内容の整理・まとめ・・・収集したデジタルコンテンツを基にグループで編集作業を行う。
- E 活動の成果発信（計画や取組の成果）・・・作成した成果物（フリーマガジン）を地域内外に配布する。また、取組についてのプレゼンテーションソフトやSNSを通じて情報発信を行う。これらと並行し、アマモの育成・育苗など自分たちが取り組める活動「海の森プロジェクト」を進めていく。

表1 「研究の経過」

時 期	取 組 内 容	
4月	【職員研修】 これまでの研究成果の共有／年間カリキュラムの構想 【学習活動】 ひきよせプロジェクトの構想・計画	
5月	【学習活動】 写真撮影の講座：プロカメラマンから写真撮影の方法を学ぶ	生徒アンケート

	【学習活動】ICT 機器の活用の仕方:iPad や編集ソフト Canva について講師を招聘し研修を受ける。	
6月	【学習活動】取材の準備:グループ分け、取材先の選定	振り返りシート
7月	【学習活動】取材の準備:取材先について調べ、質問事項を考える	
9月	【学習活動】取材の準備:地元新聞社の記者を招き、インタビューの仕方についての基礎を学び、さらに演習を行い、プロの技術を学ぶ 【学習活動】現地での取材:グループに分かれ現地での取材を行う/iPad を活用し、取材を記録、デジタルデータを画像・動画で収集する	生徒感想
10月	【学習活動】取材内容の整理・まとめ:収集したデジタルコンテンツを基にグループで編集作業を行う/iPad と編集ソフト Canva を活用し取材内容をまとめていく	
11月	【学習活動】本校主催 日置中学校文化発表会 実施報告(教育委員会研究報告会・近畿教頭会)	
12月	実施報告(白浜町校長会・白浜町教頭会・教務主任者会)	
2月	【学習活動】活動の成果発信:今年度の取組についてプレゼンテーションソフトや SNS を通じて情報発信を行う/3年生から1・2年生へ(振り返り、引き継ぎ)	生徒感想 生徒アンケート

このプロジェクトの中で本校が大切にしてきたことを2つあげる。1つ目は、「探究のプロセスを意識した学習活動」である。上記の学習場面のように、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の「探究のプロセス」を授業の中に取り入れている。これらの一連の学習活動を発展的に繰り返していくことが重要であるとしている。そして、フリーマガジンを作ることが目的ではなく、完成に至るこれらのプロセスを重視している(図2)。

2つ目は、「他者と協働して主体的に取り組む学習活動」である。手立てとして、3学年を縦割りのチーム制(異学年交流)を取り入れている。例えば、取材先ごとにグループを編成し、グループ内ではインタビュー担当、写真担当、動画担当、記録担当等に一人一役で役割を分担し、全員が主役となれる授業づくりを展開している(図3)。そ

の中で、地域の人と交流したり、グループで協働的に学習することが相手意識を生み出したり、

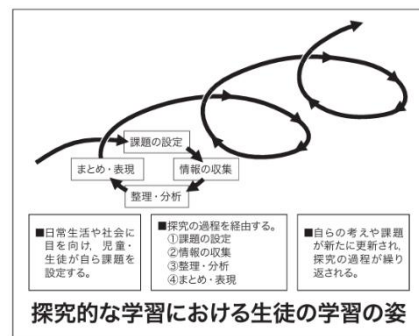


図2 探究のプロセス



図3 取材時の様子

学習パートナーとしての仲間意識を生み出している。

4. 代表的な実践

(1) 人から学ぶ

①カメラマンによる写真の撮り方講座 (図4)

フリーマガジンについての取材前の準備として、写真の撮影の仕方のコツをプロカメラマンから学ぶ。フレームの構図、視点の換え方、光の取り入れ方等のスキルを学び、実際に地域に写真を撮りに行く。視点を変えて写真を撮ることで、今までの日常とは違った風景が切り取られ、地域の魅力再発見にもつながることがねらいである。



図4 写真の撮り方を学ぶ

②新聞記者による取材と記事の書き方教室 (図5)

地域の新聞社である紀伊民報さんから記者の方に来ていただき、取材の仕方と記事の書き方を学んだ。その後、すぐに生徒は教員を相手にインタビューし、実践練習を重ねた。



図5 取材と記事の書き方を学ぶ

③T E T A U (テタウ) 山本賢さんによる学習支援 (図6)

地域のウェブデザイナーであるT E T A Uの山本賢さんから文書編集ソフトCanvaの使い方を学ぶ。また、取材後の記事の編集作業についても具体的にアドバイスをいただく。これらの関わりが、生徒のスキルを向上させたり、自信を持たせたりする効果がある。また、より一層フリーマガジンのクオリティを上げることになる。(図7)



図6 テタウの山本さんより編集作業について学ぶ



図7 編集作業での協働的な学び

(2) 企業より学ぶ

本校が環境保全活動に取り組む「海の森プロジェクト」(長野県上田市の日置電機と和歌山工業高等専門学校との共同プロジェクト)では、近年減少しているアマモ場の再生を目的に水槽でアマモの



図8 三者での共同プロジェクト



図9 企業からのガイダンス

育苗に挑戦している(図8)。アマモの発芽のためには何が必要か、発芽条件について生徒と先生も一緒に挑戦を繰り返し、試行錯誤してきた。この研究のパートナーである日置電機、和高専楠部教授からは多大な支援と助言をいただいた(図9)。企業や高専からの専門的な知見を得る

ことは生徒にも教員にも大きな学びとなる。

(4) 地域から学ぶ

昨年度は、夏の地域行事である「昼市夜市」に生徒が企画段階から参画した。事前の会議に出席し、行事の内容に提案をし、行事全体に関わることができた。当日は舞台発表でダンスを披露し、Tシャツとかき氷販売を行い、地域行事に大きく



和歌山高専
楠部真崇 教授
海洋生態系の専門家
アマモ場の再生に向け、
様々な研究をされています。

貢献した。今年度は悪天候のため、「昼市夜市」が中止となったため、10月の地域行事である「リバーサイドマラソン」に出場し、出店が出店されるエリアで本校もTシャツ販売等を行うことができた。

5. 研究の成果

総合的な学習の時間のアンケートを5月と2月の2回実施した。その結果の一部を紹介する。「総合的な学習の時間で学んだことは、自分の考えや生活に役立っていると思いますか。」(肯定的評価75%→100%) / 「体験や学習していることから、課題や目標を見つけることができますか。」(肯定的評価71%→100%) / 「どんな場面でも、積極的に人と会話したり、状況に応じたやりとりをすることができますか。」(肯定的評価42%→80%) / 「将来、日置の町に貢献しようと思いますか。」(肯定的評価48%→72%) / 「失敗しても諦めず、別の方法を考えたり尋ねたりして、挑戦することができますか。」(肯定的評価75%→100%) / 「総合的な学習の時間を通じて、自分の成長を感じることができますか。」(肯定的評価75%→100%) / 「総合的な学習の時間を通じて、自分の良さを感じることができますか。」(肯定的評価40%→60%) という結果となった。

次に生徒がどのように変容したかは、生徒や教員の感想の一部を紹介します。

◇3年間の総合的な学習の時間を振り返り、私がとても成長できたと思うのは、コミュニケーション能力とICTスキルです。ひきよせプロジェクトを進める中で、前に出て発表することや、人に自分の考えや意見をわかりやすく伝えることなど人との関わりが必要とされる場面が多くありました。文章を考える活動もたくさんあり、文章力、タイピング力、語彙力なども成長できたと感じています。(3年)

◇私はこの3年間、総合の活動を振り返ってとても良い経験ができたと思います。あまり人と話をすることが得意ではなかったのですが、最初はすごく緊張しました。でも前で発表する機会が増えて少しずつ慣れてきました。たくさんの外部からの人が私たちのプロジェクトに関わってくれ、人とのつながりを大切にしていた時間だったと思います。だからこそ私は初対面の人と話すことを頑張ろうと思えました。総合の活動以外でも、学んだことを活かせる機会があるので、高校生になってもその力を十分に発揮していきたいです。(3年)

◇総合の授業で生徒が習得したiPadでのCanvaソフトのスキルは汎用性が高い。国語、英語、社会など各教科の授業において教員が今まで以上に積極的にiPadを活用し、授業の効率化や学習の定着をより高める活動が見られるようになった。(教員)

これらのまとめの結果より、本研究の実践によって研究課題に対して一定の成果があったと言える。中学生が「地域の魅力を発信する」という理念の元、ひきよせプロジェクト等の取組が広がっていることが自信と誇りにつながるとともに、主体的に取り組む生徒を育成することができたのではないかとと思われる。

6. 今後の課題・展望

今後、引き続き「ひきよせプロジェクト」を継続していきたい。また、今年度も近隣や県内の学校関係者からの視察・授業参観依頼もあったことから、本校の取り組みがある程度認知され注目されている教育活動であることは間違いない。その中で、持続可能な取り組みとして学校文化に定着させていく手立てが必要であると感じる。

本校の生徒数は今後減少の一步をたどる。職員数の減少も避けられない。限られた時間と人数の中で活動を継続していけるかどうかが課題である。加えて、小中連携の中で、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにすること。学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントを推進することが求められている。

7. おわりに

本研究において、郷土学習の新たなカリキュラムを開発するにあたって、学校の ICT の現状を見たとき課題が山積していた。しかし、本研究助成が単に研究費の助成だけでなく、研究そのものを活性化するべく機会を与えてくださり、途中のいくつかのスクールフォトレポートが研究が進捗するペースメイキング機能となった。このことは、1年間の研究を推進するにあたって大変感謝している。

また、長野県の日置電機、和歌山工業高等専門学校の高橋教授、外部講師である T E T A U の山本さん、取材先等で訪問させていただいた地域の方々にはたくさんの支援をいただいた。この場を借りて感謝の念を表し、本研究成果報告書を閉じたい。

8. 参考文献

- 1) 文部科学省(2022) 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開
- 2) 文部科学省(2019)【総合的な学習の時間編】中学校学習指導要領(平成29年告示)解説, p.9
図「探究的な学習における生徒の学習の姿」
- 3) 田村学, カリキュラム・マネジメント入門, 東洋館出版社, 2017.3.1



近畿教頭会スライド資料



フリーマガジンひきよせ



日置中インスタグラム